

原 寛*: 日本種子植物集覽第2冊より

Hiroshi HARA*: Notes from my 'Enumeratio Spermatophytarum Japonicarum. Pars secunda'.

「日本種子植物集覽」第1冊を出版以來、内外の諸學者から早く後を出す様にとの激勵をうけたが、多忙のため遅くなり、漸く合瓣花植物の殘部であるアカネ科からキク科迄を含む第2冊の原稿ができた。しかし文部省や岩波書店の非常に好意ある取計にも係らず出版迄にはなお相當の時日を要する模様であり、又同書の性質上あまり説明文を加える事もできないので、ここに私の見解によつて學名を變更したものの一部を拾い一二説明を加えてみる事にしたが、異名其他の詳細については、同書を待たれたい。勿論同書にはこの外にも整理上必要な新組合せが多く含まれている。

1 a) *Weigela decora* (Nakai) Nakai. var. **rosea** (Makino) Hara, comb. nov. *Diervilla fujisanensis* γ. *rosea* Makino in Journ. Jap. Bot. 7-9: 26 (1931). *Weigela fujisanensis* var. *rosea* (Makino) Nakai in Journ. Jap. Bot. 12: 76 (1936).

f. **fujisanensis** (Makino) Hara, comb. nov. *D. fujisanensis* Makino, l. c. (1931), α. *typica* Makino. *W. fujisanensis* (Makino) Nakai, l. c. f. 5 (1936), var. *typica* Nakai.

f. **versicolor** (Makino) Hara, comb. nov. *D. fujisanensis* β. *versicolor* Makino, l. c. (1931). *W. fujisanensis* var. *versicolor* (Makino) Nakai, l. c. 76 (1936).

var. **viridiflava** (Nakai) Hara, comb. nov.

W. amagiensis var. *viridiflava* Nakai, l. c. 73 (1936).

f. **amagiensis** (Nakai) Hara, comb. nov. *Weigela amagiensis* Nakai, l. c. 71, f. 4 (1936).

b) *Weigela floribunda* (Sieb. et Zucc.) K. Koch var. **versicolor** (Makino) Hara, comb. nov.

Diervilla sanguinea β. *versicolor* Makino in Journ. Jap. Bot. 7-7: 17 (1931). *Weigela kariyosensis* Nakai in Journ. Jap. Bot. 12: 81, f. 8 (1936).

f. **concolor** Hara, nom. nov. *D. sanguinea* α. *Nakaii* Makino, l. c. 17 (1931), excl. syn.; Ill. Fl. Nipp. 99 (1940). *W. sanguinea* var. *Nakaii* (Makino) Makino, Ill. Fl. Jap. ed. rev. 99, f. 297 (1949).

c) *Weigela coraensis* Thunberg var. **fragrans** (Ohwi) Hara, comb. nov.

* 東京大學理學部植物學教室. Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo.

Weigela fragrans Ohwi in Journ. Jap. Bot. 24: 75 (1949).

タニウツギ屬では上記の組合せを行つたが、これは本屬について次の様な私の考が反映したものである。元來この類は所謂 Arcto-Tertiary elements の一であり、その後我國において著しい分化を示し、分布と分化の問題を考えるのに興味ある一群である。ウコンウツギはアムール、ウスリー地方を二次的の分布の中心とした種で氷河期の古い時代に樺太、北海道を経て南下し本州北部に達し、現在分布の南限は陸中の高山である。これに接しそれ以南の山地ではキバナウツギがおき代り南へ那須火山帯から關東山脈、御坂山脈にまで分布するが、本州中部で北陸側の山地に見ない點が面白い。この2種は最近各々別屬として扱われているが、ウコンウツギは狭義のタニウツギ屬のものと雜種を作り、これらは案外近縁なものである。

タニウツギ節は我國で最も分化して居り、その基本となる形はタニウツギ、ニシキウツギ、ヤブウツギ、ツクシヤブウツギ、ハコネウツギである。タニウツギ(*Weigela hortensis* K. Koch)は北海道の石狩低地帯以南に産し、本州中部では北陸側の山地に生じ、この點キバナウツギやニシキウツギと對照的であり、それから關西では逆の下つて丘陵地に生ずる。葉下面特に脈の兩側に開出した白軟毛を密生し、花冠は蕾の時は色濃く、開くと淡紅色となるが外側の方が色濃く、花筒の半ば上でやや急にふくれ、柱頭は花冠とやや同長、子房はほぼ無毛である。花冠の大きさは著しく變化し、長さ2~3.5cm許である。

ニシキウツギ(*W. decora* Nakai)は藏王山附近から南へ關東ではタニウツギ分布の東南側の山地殊に火山に多く生じ、西日本では點々と山上に分布し九州霧島山に及んでいる。全體に毛は少いが葉下面主脈上、殊に中央部の中肋上に屈毛を密布し、花冠は蕾の時は緑白色で後内側から紅色に變るのが普通で、花筒は上方へ漸次ふくらみ、若枝、花冠、子房は無毛又は少し伏毛があり、柱頭は花外へ超出する。この類には可成り變異があり、伊豆天城山から記載されたアマギベニウツギはニシキウツギより毛の少い形で葉下面脈上の伏粗毛はやや疎になり、花は初めから紅色のものが多し。又フジサンシキウツギは逆に毛の多い形で花は初めから紅色、花冠や子房の毛もニシキウツギより多いが、中井博士(1936)も既にのべられた様に餘りはつきりした形ではない。牧野博士は、濃淡はあるが花が初めから紅色のものにサンシキウツギと名付けられたが、中井博士は花が初め白く後紅變するものを基準とされている。毛の多少は他の地域でも往々變化し種として分けるのは無理である。これを變種に下すと變種名として最も早いものをとることとなる。例えばフジサンシキウツギをニシキウツギの變種と見なした場合に、變種名としてはフジサンシキウツギの一品であるフジベニウツギにつけられた var. *rosea* が最も早いのでこれと組合せて上記の學名となる。そうして牧野博士が基準とされた花が初めから紫紅色のフジサンシキウツギは、命名上は逆にその色變りとして f. *fujisaniensis* の様な形になる。したがつて學名は長たらしくなり分り難いものになるのは現行

命名規約の一缺點である。

次にヤブウツギ (*W. floribunda* K. Koch) は最も毛が多いので著しく、若枝、葉、子房、蒴果にまで一面にピロード状の立毛を密生し、花冠にも毛多く初めから濃紅色の形が普通で、嫩枝の葉は基部円く殆ど無柄となる。關西の丘陵地に多く東は東海地域に及び、更に武蔵刈寄山に多いカリヨセウツギは嫩枝の毛が少く葉が闊大であるが、他はヤブウツギによく一致しその一形である。これは關西要素が富士山の北側を廻つて關東に入込んでいる一例と考える。そうしてこの東限に近い甲駿地域でこの類は特に變化に富み分類困難な形がある。即ちヤブウツギーケウツギーフジサンシキウツギーニシキウツギと各々中間形によつて連つて變化する。ヤブウツギは三河や伊那谷南部迄は大體基準形である。ケウツギ (*W. sanguinea* Nakai) は詳しい産地は不明であるが富士山産が基になつて居り、立毛を有する點ヤブウツギに近いが若枝や子房の毛は少く、駿河龍爪山にもこの形がある。遠江秋葉山にはこの毛がやや斜上する形がある。又これに近く毛はやや伏して子房の毛は可成り多く嫩枝の葉はニシキウツギの様に短柄を有する形が富士山、三ツ峠、甲州島澤等に産し、フジサンシキウツギに近づく。この伏毛が更に少くなつて花は初めから濃紅色のものが駿河志太郡瀬戸谷村にあり、遂に花が初め緑白色で紅變するニシキウツギに移る。富士山麓では二つの異なる形が混生している場合もある。これらの中間形が自然の分化の方向を示すものか、或は2種が後に相接して雜種を作りできたものかは未だ斷定できない。なお牧野博士が *Diervilla sanguinea* Nakai とされたものはケウツギではなくカリヨセウツギであり、反つてサンシキウツギ中に中井博士のケウツギに近い形が含まれている。

Weigela japonica Thunb. は原産地や記載によると判斷に迷うが、原標本を見られた中井博士によつてツクシヤブウツギである事が明かにされた。この形は若枝や葉、子房、花冠等一面に毛が多いが、毛は開出せず斜上又は伏臥してこの點フジサンシキウツギに似て居り、四國、九州に廣く分布している。面白いことはこの九州産と殆ど區別できない形 *var. sinica* (Rehder) Bailey が中支にある事で、浙江、湖北、湖南、四川に分布している。又葉の毛が少く子房はほぼ無毛な形が山東、安徽、浙江、湖南に産するが、未だ區別されていない。

海岸地方に適應してできたハコネウツギ (*W. coraeensis* Thunb.) は、北海道南部から九州まで分布し太平洋岸に多い。葉は大きく厚く下面脈上に毛を散生する外は、若枝、花冠、子房も殆ど無毛で、花冠は大きく中央上で急にふくらみ初め白く後内側から紅色に變り、萼片は長い。八丈島に産するニオイウツギは本種の花冠の小さい一地方形である。

以上の諸種の間には自然に雜種ができ、又園藝品にも雜種性のものがあり、Rehder, *Man. Cult. Tr. & Shr. ed. 2, 851* (1940) にあげてある如く色々な組合せのものが知られていて益々複雑になる。例えば箱根湯本の須雲川の谷では山から下りてきたニシ

キウツギと、海岸から谷へ入りこんだハコネウツギとが混生し、兩種の基準形と共に、毛や花冠の形其他で兩種の色々の段階の中間を示す形が生えていて、これは明かに兩種間の自然雜種と考えられる。又ベニウツギといわれて栽培されているものにも數形あるらしいが、その一で小石川植物園の山草園にある1本は、ハコネウツギとタニウツギの雜種と思われる。

以上は第一次的の整理を行うための考察で、もつとよく調べたい形も多く、福島縣の山地にあるベニウツギに似た形のものや、四國九州におけるヤブウツギ、ツクシヤブウツギ、ニシキウツギの關係等も再檢したい。地方の方々が資料を提供して下さる様御願する。

2) *Viburnum plicatum* Thunb. var. **glabrum** (Koidz. ex Nakai) Hara, comb. nov.

V. tomentosum var. *glabrum* Koidzumi ex Nakai, Caprif. Jap. 29 (1921); Tr. & Shr. Jap. ed. 2, 1: 598 (1927). *V. amplissimum* Satake in Journ. Jap. Bot. 14: 200 (1938). *V. plicatum* f. *glabrum* (Nakai) Rehder, Bibl. Cult. Tr. & Shr. 604 (1949).

ケナシヤブデマリはヤブデマリの單に毛の少い形ではなく佐竹博士(1938)が述べられた様に可成りはつきりした形であり、その分布も日本海型氣候である東北から北陸地區に限られていて地理的變種と認めてよい。これと同じ型の變異がゴマキ對マルバゴマキ(オオバゴマキ)に見られる。ヤブデマリの最も早い適法の種名が *Viburnum plicatum* Thunb. であるのでこの新組合せが必要になった。

3) *Sambucus Sieboldiana* Blume var. **Miquelii** (Nakai) Hara, comb. nov.

S. racemosa var. *pubescens* Miquel, Cat. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 56 (1870), nom. nud. -Matsum., Ind. Pl. Jap. 2-2, 602 (1912), p.p. *S. racemosa* subsp. *pubescens* Schwerin var. *pubescens* Schwerin in Mitt. Deuts. Dendr. Ges. 18: 47 (1909); 29: 224 (1920), p.p. *S. racemosa* var. *Miquelii* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 31: 211 & 214 (1917). *S. latipinna* Nakai var. *Miquelii* (Nakai) Nakai, Caprif. Jap. 11 (1921); Fl. Sylv. Korea. 11: 25, t. 4 (1921). *S. racemosa* subsp. *euracemosa* var. *typica* subvar. *pubescens* Wolf in Mitt. Deuts. Dendr. Ges. 33: 27 (1923), p.p. *S. Buergeriana* Blume [ex Miquel, Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 2: 265 (1866), pro syn.] ex Nakai in Bot. Mag. Tokyo 40: 474 (1926), cum var. *Miquelii* Nakai; Tr. & Shr. Jap. ed. 2, 575, f. 260 (1927).

樺太北海道等に産するエゾニワトコは、本州のニワトコに比して全體壯大で小葉大きく鋸齒も粗大なことが多く、花序にまで莖葉と同じ様なやや尖つた毛が出るので區別されている。北方へ行くと大形になるのは他の多くの北方系植物でも見られる變化であり、本州中部でも山地へ行くと小葉の大きいオオニワトコの形があり、更に若枝や葉に毛が

多くでるケオオニワトコとなり、エゾニワトコに近づくが、花序には粒状の毛が密布している。しかしこの毛の差異も微妙な場合があり、花序の毛が少し長く乳頭状になる形も時々あつて、本州北中部の山地からエゾニワトコが報告される事がある。歐州産の *S. racemosa* と我國のニワトコ類とは中井博士 (1927) がはつきり指摘された通り異なるが、極めて變異に富んだ本類ではエゾニワトコはニワトコの北方變種として扱うのが適當と思う。そうしてニワトコにもエゾニワトコにも双方に、葉の廣狹、毛の多少、果色等に於て同じ様な變化が見られる。

4) *Adenophora pereskiaefolia* (Roem. et Schult.) Fischer var. **heterotricha** (Nakai) Hara, comb. nov.

A. Lamarkii Fisch. var. *longifolia* Nakai, Rep. Veg. Daisetsu Mts. 13 (1930), nom. seminud. *A. Onoi* Tatewaki et Kitamura in Act. Phy. Geo. 5: 209 (1936). *A. moiwana* var. *heterotricha* Nakai ex Hara in Bot. Mag. Tokyo 51: 895 (1937).

var. *moiwana* (Nakai) Hara, comb. nov. *A. moiwana* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 36: 126 (1922) -Hara in Bot. Mag. Tokyo 51: 895 (1937).

モイワシヤジン類が *A. latifolia* Fischer に近縁である事は既に日高のフローラ (1937) で述べたが、その後々張岳、層雲峽産の標本を米國へ持参してダフリヤ産の *A. latifolia* と比較した。ダフリヤ産はやや丈が高くなり花序は下部で少し分枝し花數が多くなるものが多いが、北海道産でもよく生育したものは同じ形となりよく一致する。又ダフリヤ産では萼筒に微細な乳頭状突起のであるものがあるが、全く同形が張岳にある。北海道では葉下面脈上にやや硬い毛のでる形、即ちケモイワシヤジンや、礫地に生じ丈低く花序も単一で葉を輪生した形モイワシヤジンが多いので、これらを一應變種としておく。ダフリヤから東方へ来てモイワシヤジン、ケモイワシヤジンとなり、更に本州の高山に達して少しく變化したものがミヤマシヤジンであり、ヒメシヤジンである。なお *A. latifolia* よりは *A. pereskiaefolia* の方が早い名であるのでそれをとる。しかしアムールやウスリーで Regel, Korshinsky 等が *A. latifolia* にあてているものは、標本を見ると *A. divaricata* 系のものが多く含まれているので注意を要する。

5) *Adenophora triphylla* (Thunb.) A. DC. var. **japonica** (Regel) Hara, comb. nov.

A. pereskiaefolia var. γ . *japonica* Regel in Ind. Sem. Hort. Petrop. 1864, Suppl. 17 (1865). *A. Thunbergiana* Kudo, Med. Pl. Hokk. no. 91 (1922), cum fig.; Rep. Veg. N. Saghal. 224 (1924), excl. syn. Thunb. -Hara in Bot. Mag. Tokyo. 51: 896 (1937). *A. triphylla* subsp. *aperticampanulata* Kitamura in Act. Phy. Geo. 10: 309 (1941).

ツリガネニンジン類については北村博士 (1941) が述べられている通り同博士と數回

意見を交換したので、シベリアから朝鮮にかけて分布するニオイシヤジン、九州のナガサキシヤジンと日本列島に普通なツリガネニンジンが、種を大きく見れば同一種であり、その最も早い學名がナガサキシヤジンにつけられた *A. triphylla* A. DC. である點は全く同意見である。ニオイシヤジンとツリガネニンジンとの基準形を比べるとはつきりと區別ができ、分布地域も異なるので、この兩者は地理的亞種の關係にあるといつて差支えない。しかし命名上は、外部形態で兩者のやや中間形を示すナガサキシヤジンが基準となり、北村博士はニオイシヤジンをナガサキシヤジンの變種とし、ツリガネニンジンをナガサキシヤジンの亞種とされた。ナガサキシヤジンとツリガネニンジンとの區別は時に分り難い場合もあつて特に亞種とする程でなく、變種としておく方が妥當と思ふ。勿論現在の命名形式で互の類縁關係を明かに表示しようとするのは無理であるが、より分りよいと思われる形に直しておこうと思ふ。したがつて最も早い變種名をとり上記の組合せが必要となる。

○山形縣にもグンバイヒルガホが発生した (佐藤正己) Masami SATO: *Ipomoea pes-caprae* Roth found in the coast of Yamagata Prefecture, Northern Japan.

グンバイヒルガホは九州の南部や小笠原島から八丈島あたりまではよく繁茂する、亞熱帯性の海濱植物であるが、その種子が海流によつて運ばれ、自生地よりも遙に北方の地域にも発生し、ただ一夏だけで姿を消すことは屢々報告されている。この様な意味の産地としては、太平洋岸では土佐や紀州の海岸から神奈川縣の七里ヶ濱や葉山などがあり、日本海岸ではずつと北上して能登半島や越後まで知られている。

去秋、山形縣立東高等學校の文化祭にグンバイヒルガホの鉢植が出品されているので、出所を聞いてみたら、同校の生物研究班の生徒が山形縣飽海郡吹浦村の湯ノ田鑛泉附近の海岸でただ1本を採集したもので、附近をよく捜し廻つたが、7枚ばかりの葉をつけたこの1個體しか見當らなかつた由である。其後、山形大學農學部の腊葉室で、吹浦よりは若干南になるが、山形縣西田川郡の七窪の砂丘地で後藤岩三郎講師が1947年10月4日に採集したグンバイヒルガホの標本を發見した。この標本は前者に比較すると貧弱ではあるが、葉は17枚も着けていた。なお吹浦村は北緯39度より少しく北に位するが對島海流の影響を受けて温暖でタブノキ林が見られる所である。